

『竹取新聞』でも掲載している「室礼（しつらい）」「」に関するの昨年実施した社内インタビューのご紹介です。日々の暮らしや行事の参考になれば幸いです。

## 十二月 冬至

冬至は一年の中で最も昼が短く、夜が長い日。

—先日、宮前さんから頂いた柚子でゆず湯に入りました。ありがとございました！わざわざ持ってきてくださったその気持ちに心までほっこり温まりました。

宮前 それは良かったです！

—柚子はご実家の畑で採れたもの伺いました。

宮前 はい、そうです。数年前から畑で柚子が取れるようになりました。「桃栗3年、柿8年、柚子の大バカ18年」という言葉があり、それくらい実が付くまでに時間が掛かると言われ、父も「長年実らずあきらめかけた頃に、実がなった！」と、以前話していたことを思い出しました。

—「桃栗3年、柿8年」は聞いたことがありましたが、柚子はそんなに時間が掛かるのですね。

宮前 他にも「柚子は9年でなりかかる」「柚子は9年の花盛り」という言葉もあるそうで、柚子は9年経って花を咲かせ、さらに9年後に実をつけるそうで、まさに何事も成し遂げるまでには相応の年月が必要だと教えてくれているようですね。

—子どもの成長のように時間が掛かるんですね。ところで、どうして冬至の日に柚子湯に入るのでしょうか？



宮前 柚子湯の由来としては、冬が旬の柚子は香りも強く、強い香りのもとには邪気がおこらないという考えもあります。柚子（ゆず）＝融通が利く、冬至＝「湯治」の語呂合せからとも思われていますが、もともとは運を呼びこむ前に厄払いするための禊（みそぎ）だと考えられています。

—語呂合せから来ていたのですね！

宮前 ちなみに、柚子は実るまでに長い年月がかかるので「長年の苦労が実りますように」との願いも込められています。

—なるほど！社内では柚子胡椒や柚子塩、柚子ポン酢を作っているクルーもいて、この時期ならではの季節を感じます。室礼に盛られた内藤新宿唐辛子は、元々新宿御苑で育てられていた江戸の伝統野菜のようで、会社が新宿にあることもありますから、何だか誇らしいですね。

宮前 本当ですね。2、3年前から父が育てていたみたいですが、江戸の伝統野菜だというのは私も今年初めて知りまし

た。畑で見た唐辛子はピカピカしてちょうど火の見立てにもなり、厄除けとしても強そうな感じがしました。

—厄除けとしてもご利益がありそうですね！唐辛子ですね！

宮前 そうですね。お供えから下げたら、柚子と唐辛子を使って私も柚子胡椒を作ってみようかなと思っています。

—それはいいですね！こんなにやく芋も育てられているそうで何でも育てていることに本当に驚かされます。

宮前 こんにやく芋は育てるのが難しく、去年は枯れてしまいました。今年も挑戦する予定です。実家の畑から収穫してきた柚子や内藤新宿唐辛子なども一緒に盛らせて頂いたり行事の由来を知れば知るほど、過ごし方や感じ方もなんだか、楽しく変わってくるものです。

—どんどん暮らしが豊かになっていきますね！12月に入り、だんだん陽が暮れるのが早くなってきましたね。

宮前 本当ですね。17時頃には外はすっかり暗いですね。室礼の先生が仰るに



宮前さんのご実家の畑で実った柚子と内藤新宿唐辛子



## 12月の室礼

柚子：無病息災の願いを込めて。

小豆：赤い色が邪気払いに繋がる。

三宝荒神様のお札：かまどの神、火の神として知られ、三宝荒神は災いから守り、金銭を融通してくれる力強い神として家の守護神。

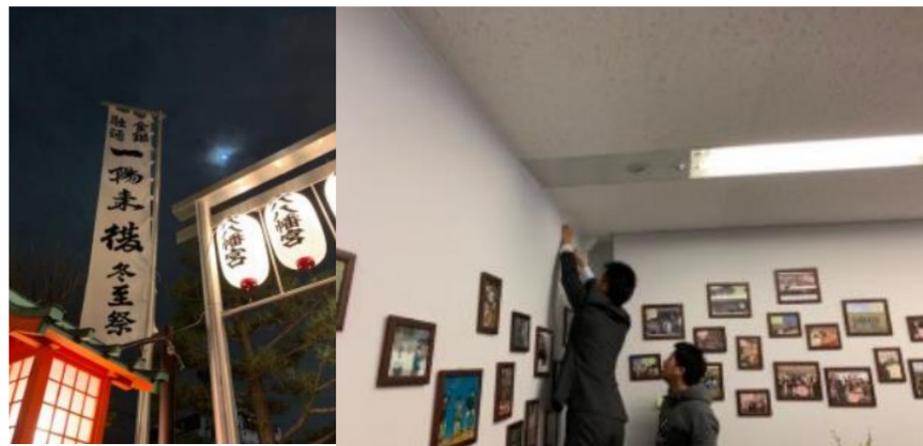
内藤新宿唐辛子：火に見立てた盛り物。赤色は厄除けに。

南瓜：かぼちゃ（別名：南瓜なんきん）。無病息災の願いを込めて。

こんにやく芋：「こんにやく」は別名「砂おろし」「砂払い」と言われ、

1年間で体内に溜まった砂（不要）を追い出してくれるとされています。

ねずみ瓜：年が終わり、新たな年を迎えることを、十二支の始まりである「子（ね）」にかけた、言葉の盛り物。枯れてもまた芽吹いて連なる瓜の蔓に、年々のつながりを託します。



写真左：毎年、早稲田にある穴八幡宮へ宮前さんが参拝に！

写真右：その年の恵方に御守りが向くように、反対側の壁のなるべく高いところに貼るため、正確な方角を皆で真剣に確認していきます。



## 「一陽来復」の御守り

は、この時期は周りのお年寄りの方などは、冬至に向けて、体調もあきらかに落ちていくことが多いようです。

―それはどうしてでしょうか？

宮前 「一陽来復」のとおり、冬至を境に、陰極まって陽になっていくので、自然なことではあります。そういう意味では、この時期はあまり無理せず、南瓜やこんにやくを食べたり、柚子湯に浸かったりと、先人が残してくれた冬至の風習に力をお借りするのがいいそうです。

―一陽来復・・・何年も前から宮前さんが一陽来復の御守りを買って来てくださっていましたが、一陽来復にはどういう意味があるのでしょうか？

宮前 昔から、冬至を境に春が近づくことから、冬至は運が上がる日だと考えられていたようです。この考えは中国で、「一陽来復」と呼ばれ、冬が終わり、春が始まるという意味の他にも、悪いことが続いた後で物事がよい方向に動き出すという意味があります。

―なるほど！

宮前 昔は陰と陽に分けて物事などを捉え、この2つが「バランス」を保つことで世の中のあらゆる事が上手く回るとされていたそうですので、「一陽来復」には陽が戻ってくるという意味があり、冬至を指す言葉となっ

たとも言われています。

―それは知りませんでした！

宮前 冬至は、一年で最も昼が短く夜が長い日のことで、明るい時間が短いと何となく気分も曇りがちですが、この日を境に昼がどんどん長くなるため、冬至以降は、明るい時間が増える転機の日とも言えるんです。

―転機と受け止めると明るくなります。

宮前 そうですね。そう考えると、冬至はこれからよいことが起こる兆しにも思えますね。そういう意味では冬至は、一年の始まりとも考えられる大事な節目ですから、きれいにお掃除をしたり、「運盛り」と呼ばれる「ん」のつく食べ物を頂いたり、柚子湯に入ったり、たくさん運を味方につけられるよう過ごしてみるのがよさそうで、これらを冬至に行くと、これからの一年を無病息災で過ごせると言われているようです。

―そういう謂れがあったのですね！

宮前 そんな風に先人が残してくれた行事の風習には、やっぱり季節の流れのり、自然に沿って過ごしていけるからか、どこか安心感を覚えます。そして、そんな安心感が、やっぱり私たち人間も自然の一部であることを思い出させて

くれているようです。

―本当ですね。

宮前 また、室礼の盛り物のねずみ瓜は、一年が終わり新たな年を迎えることを、十二支の始まりである「子（ね）」にかけた言葉の盛り物です。枯れてもまた芽吹いて連なる瓜の蔓に、年々の繋がりを託します。師走は、時間的にも気持ち的にも忙しくなりがちですので、なおさら心のゆとりを持って、行事を楽しめたらと思います。

―本当ですね、今回もインタビューありがとうございました。